

國學院大學學術情報リポジトリ

『古事記』における刀剣の一考察： 古代刀剣の編年研究の視点から

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-05-22 キーワード (Ja): 『古事記』, 刀剣観, 神聖性, 装飾付大刀, 編年研究 キーワード (En): 作成者: 篠崎, 和 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002001652

論 文 要 旨

学籍番号	233113	氏 名	篠崎 和
論文題目： 『古事記』における刀剣の一考察—古代刀剣の編年研究の視点から— (内容の要旨) 『古事記』(以下、『記』)には91件の刀剣関連用語が登場し、国譲りや神武東征など物語の根幹をなす場面においても重要な道具立てとなるが、管見の限り刀剣そのものは、従来の古事記研究においてそれほど重視されてはこなかった。 一方、『記』が成立する時期(712)とは、7世紀中頃に装飾付大刀が急激に衰退し消滅する中で方頭大刀のみに集約され、律令体制下、服装と佩刀(方頭大刀)による階層化が行われていく、歴史的変革期の間にあたる。 本稿は、以上の経緯を踏まえ、『記』の刀剣描写に着目し、そこに当時の刀剣に纏わる痕跡や記憶が何かしら投影されているとの立場から、刀剣の具体的なイメージ、「古事記の刀剣観」について考察することを目的とする。 第一章では、大石氏他¹を参考に作成した『記』の刀剣関連用語網羅の一覧表に基づき、①『記』に剣と刀の区別が無いこと、②十拳剣は神と命のみが用い、神剣と呼ぶに相応しいことなどを確認した結果、石上神宮禁足地出土の内反素環頭大刀の存在から、『記』の刀剣の主要なイメージとして「大刀」を想定するに至った。 第二章・第三章では、頭椎大刀(『記』の記述より命名)・双龍環頭大刀(頭椎大刀との関連性)・方頭大刀(上述)・倭系大刀(祭祀に特徴)の装飾付大刀四種に焦点をあて検討した。 結果、①頭椎大刀と物部氏、双龍環頭大刀と蘇我氏がそれぞれ結び付くこと、②頭椎大刀は6世紀前半頃に出現し、双龍環頭大刀は6世紀前葉頃に舶載されること、③両大刀は6世紀後半～7世紀初頭にかけ盛行し、④消滅年代もほぼ重なり、その背景に乙巳の変(645)が想定できることなどを確認した。 倭系大刀は、①5世紀後半頃には有機質(木製や鹿角製)の柄頭、直弧文や漆塗りの装飾を特徴とし、②5世紀末頃に振り環頭大刀が出現すること、③7世紀にほぼ姿を消すが、装飾性の高い一部は伊勢神宮の神宝・玉纏太刀に繋がることなどを確認した。 第四章では、装飾付大刀の分布と神聖性を検討し、分布的特徴は、それぞれの装飾付大刀の流通に関わった有力氏族の動向を表している可能性を指摘した。 神聖性について、①刀剣は4世紀代から祭祀の供献品となり、古墳時代を通じ7世紀初頭までみられること、②5世紀中頃に幣帛の原型を成し、律令期の祭祀や8～9世紀以降の神宝への繋がりが見えることを確認した。 最終的に、『記』の刀剣観には①武器、②威信財、③神聖性が反映されていると結論付けた。(1,000字)			
キーワード(5語) 『古事記』、刀剣観、神聖性、装飾付大刀、編年研究			

¹ 大石純子・酒井利信・原口理恵子・軽米克尊・村上雷多「『古事記』にみられる武道関連用語に関する一考察」『身体運動文化研究』第20巻第1号、身体運動文化学会、2015。